

2019 年度博士論文（要旨）

フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能向上プログラムの開発

桜美林大学大学院 老年学研究科 老年学専攻

服部 ユカリ

## 目次

第1章	序章		
1.	はじめに	・・・	1
2.	用語の定義	・・・	1
第2章	本研究の目的と意義	・・・	2
1.	目的	・・・	2
2.	意義	・・・	2
3.	研究の構成	・・・	2
第3章	研究1「地域在住高齢者の写真に関する実態の解明」		
1.	目的	・・・	2
2.	対象	・・・	2
3.	方法	・・・	2
4.	結果	・・・	3
5.	考察	・・・	3
第4章	研究2「介護予防教室に導入したフォトボイスの効果ー参加者の FGI からー」		
1.	目的	・・・	4
2.	対象	・・・	4
3.	方法	・・・	4
4.	結果	・・・	4
5.	考察	・・・	4
第5章	研究3「フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能の維持・向上をめざす介護予防プログラムの開発」		
1.	目的	・・・	5
2.	対象	・・・	5
3.	方法	・・・	5
4.	結果	・・・	7
5.	考察	・・・	7
第6章	総括	・・・	8
	文献	・・・	9

## 第1章 序章

### 1. はじめに

高齢者が、社会の中で、できるだけ自立して、自分らしく生活していくためには、生活の場での活動やそれを通じた他者との交流を含む生活機能の維持・向上が重要である。本来の介護予防の目的である生きがいや自己実現を支援するためには、高齢者が自ら自身に必要なものに気づき、自分にふさわしい活動を見出し、主体的な自己決定によって継続的に参加し、生活機能を高めることができるようになることを支援するプログラムが必要である。生活機能を高めるためには、一時的な行動の変化ではなく、変化した行動や選択した活動を継続することが必要であり、その積み重ねにより生活機能が維持され、徐々に高まっていく。そのためには、自らの生活上の問題を主体的に解決することのできる力を獲得すること、すなわちエンパワメントが必要である。エンパワメントは、すべての人の潜在能力と可能性を引き出し、質の高い人生を送ることのできるよう、その個人を力づけるという観点で捉えられ広い分野で取り入れられている。WHOの「ヘルスプロモーションは、人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセス」という定義にエンパワメントの概念が強調されている。

住民をエンパワメントする手法として、研究者も現場の人たちとともに民主的な立場で問題解決に参加し、現場に永続的な変化をもたらす改善することを目指すアクションリサーチがある。その一つにフォトボイスがある。これは、参加者が撮影した写真とそれについての自身の語りを題材にしたグループでの話し合いをとおして問題解決のための行動を促す手法であり、1990年代 Wangらが公衆衛生分野の研究手法として開発した。

フォトボイスを用いた研究は、海外では公衆衛生学、社会福祉学、心理学など様々な分野において、高齢者を含む幅広い年齢層で実施されているが、日本では数件のみで、高齢者を対象にした研究はほとんど見当たらない。

写真の心理的効果については写真を「見る」ことにより、自己イメージの改善や自尊心が高まるという報告や、写真撮影が、「自律性・有能感」を育むことが示唆されている。また、写真を見ながら対話することは、視覚に訴えるため、内容を共有することが容易になる。写真を撮影し、見ることに加え、それについて語るというフォトボイスは、自己決定に関する自律性を高め、有能感を生むとともに相互理解が促進され、エンパワメントに繋がる可能性があるが、高齢者に対するフォトボイスを用いた介護予防プログラムは開発されていない。

研究者らは、写真撮影を部分的に取り入れた介護予防プログラムを自治体と連携して2011年から継続的に実施し、認知機能や学習に関する満足度が高まり、生活機能が変化する可能性の示唆を得ている。この蓄積をもとに、フォトボイスを取り入れた介護予防プログラムを開発することが可能と考えた。

### 2. 用語の定義

・生活機能：ICFの「心身機能・構造」、「活動」、「参加」から構成される、人が生きていくための機能全体とする。また、「心身機能・構造とは、体の働きや精神の働き、または体の一部分の構造、活動とは、生きていくのに役立つ様々な生活行為であり、能力と実施状況の2側面がある。参加とは、社会的な出来事に関与し、役割を果たすこと」とする大川の定義

を用いる。

・エンパワメント：「高齢者が自身の内なる力を引き出し、生活を主体的に調整し決定する力を高めていくこと」とする。

・フォトボイス：Wang らが開発した「参加者が撮影した写真とそれについての自身の語りを題材にしたグループでの話し合いをとおして問題解決のための行動を促す手法」とする。

## 第2章 本研究の目的と意義

### 1. 目的

本研究の目的は、フォトボイスを用いて、地域在住高齢者がエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながる介護予防プログラムを開発することである。

### 2. 意義

フォトボイスを用いたプログラムにより生活機能の維持・向上が可能になれば、新たな介護予防の方法として活用できるだけでなく、QOLの向上へ寄与し、地域エンパワメントやヘルスプロモーションへの拡大が期待できる。

### 3. 研究の構成

本研究は次の3つから構成される。

研究1では、高齢者の写真に関する基礎的なデータを収集し、高齢者に対して、写真を媒体として活用できるかを探索するため地域在住高齢者の写真に関する実態を解明した。研究2では、介護予防プログラムの一部としてフォトボイスを取り入れたプログラムを作成し、高齢者の生活機能を高める可能性があるかを探索した。研究3では、研究2の結果をもとに、フォトボイスプログラムを改善し地域在住高齢者をエンパワメントし、生活機能向上を目指す介護予防プログラムを開発した。

## 第3章

### 研究1 「地域在住高齢者の写真に関する実態の解明」

#### 1. 目的

地域在住高齢者の写真に関する基礎的なデータを収集し、写真を撮る高齢者の属性を明らかにし、写真を媒体として活用できるかを探索する事を目的とした。

#### 2. 対象

北海道H市A地区在住の65歳以上の住民で健康講座に参加した者、および地区活動やクラブ活動などの活動に参加した者。

#### 3. 方法

無記名自記式調査票によりデータを収集した。調査項目は、属性、老研式活動能力指標、家族・友人との交流、写真鑑賞の好き嫌い、日常的な写真撮影状況等とした。分析方法は、写真鑑賞、写真撮影、カメラ機器の所有と各変数との関連について $\chi^2$ 二乗検定を行った。

調査期間は、平成 28 年 10 月 20 日から 30 年 9 月 16 日であった。

#### 4. 結果

##### 1) 回収数および対象者の属性

対象者は 169 人であり、男性 70 人 (41.4%)、女性 99 人 (58.6%)、平均年齢は、74.6 ± 5.7 歳であり、年齢は範囲 65 歳～94 歳で、独居は 40 人(23.7%)であった。老研式活動能力指標の手段的自立は、4.9 ± 0.4 点、知的能動性は 3.9 ± 0.4 点、社会的役割は 3.6 ± 0.8 点、合計は 12.4 ± 1.4 点であった。

##### 2) カメラ機器の所有・写真鑑賞・写真撮影の状況

デジタルカメラを所有している者は、120 人(71.0%)、カメラ機能付き携帯電話を所有している者は、140 人 (82.2%)、両方所有している者は 105 人 ( 62.1% )、両方とも所有していないのは 14 人 (8.3%) であった。1 人を除き写真鑑賞は「非常に好き」「まあ好き」であった。写真を「しばしば撮る」は、38 人 (22.5%)、「時々撮る」は 69 人 (40.8%)、「あまり撮らない」は 35 人 (20.7%)、「まったく撮らない」は 27 人 (16.0%) で、6 割以上が写真撮影をしていた。

##### 3) 写真鑑賞と属性・生活状況

写真鑑賞が「非常に好き」な者は、「まあ好き」に比して、写真撮影をする ( $p < 0.001$ )、デジタルカメラを所有している ( $p = 0.001$ )、カメラ付き携帯を所有している ( $p = 0.030$ ) 者が有意に多く、性・年齢区分では有意な差は認められなかった。

##### 4) 写真撮影と属性・生活状況

写真を撮影する者は、撮影しないに比して、独居ではない ( $p = 0.018$ )、老研式活動能力指標の知的能動性が満点 ( $p = 0.001$ )、社会的役割が満点 ( $p = 0.011$ )、合計点が満点 ( $p = 0.017$ )、家族・親戚との交流が 5 人以上 ( $p = 0.017$ ) の者が有意に多かった。性・年齢区分・健康度自己評価・通院の有無では有意な差は認められなかった。

##### 5) カメラ機器の所有と属性・生活状況

デジタルカメラとカメラ付き携帯を両方所有しているのは、いずれかを所有しているに比して、男性 ( $p = 0.025$ )、独居以外 ( $p = 0.016$ )、写真鑑賞が非常に好き ( $p = 0.014$ )、写真撮影をする ( $p < 0.001$ ) 者が有意に多く、年齢区分、老研式活動能力指標では有意な差は認められなかった。

#### 5. 考察

本研究で、自立した地域在住高齢者は写真鑑賞を好み、カメラ機器を所有しており、また写真撮影をするものは、知的能動性が高く、社会的交流も活発である一方、性や年齢には関係しないことが分かった。カメラ機器について本研究では、90%以上がカメラ機器を所有しており、市場調査の結果からも高齢者にとって写真撮影は身近に関心が高いものであった。本研究から、一定の活動性がある高齢者に対して介護予防プログラムに写真を媒体として用いることの有用性が確かめられた。

## 第4章

### 研究2 「介護予防教室に導入したフォトボイスの効果—参加者の FGI から—」

#### 1. 目的

研究2では、写真を用いるフォトボイスの手法を介護予防教室のプログラムの一部として取り入れ、高齢者の生活機能を高める可能性を探索することを目的とした。

#### 2. 対象

介護予防教室の対象者は、北海道 H 市在住の 65 歳以上の要介護認定を受けていない者であり、本研究の FGI 対象者は、この介護予防教室に最後まで参加した 34 人のうち、各グループから選定した 7 人とした。

#### 3. 方法

##### 1) 介護予防教室のプログラムとフォトボイスプログラム

介護予防教室の内容は、ウォーキングとミニ講話にフォトボイスを加えた複合プログラムとした。参加者を、5-6 人ずつのグループとした。全 13 回を平成 29 年 5 月 10 日から 29 年 10 月 25 日までに実施した。ウォーキングプログラムは、ウォーキングの記録をつけ、教室参加時に報告するもの、ミニ講話は、生活と健康に関連する内容であった。フォトボイスプログラムは、カメラの機能と写真のプリントアウトの方法を覚え、テーマに関する写真を撮って持ち寄り、それについてグループで意見交換をし、最後に写真集を完成させた。写真のテーマは、前半の 4 回は、各グループで自由に決め、後半の 4 回は、自身や生活について振り返るよう、運動、役割、楽しみ、健康とした。

##### 2) データ収集方法・分析方法

教室の全日程終了後に、FGI を行い、フォトボイスや教室の感想について尋ねた。FGI を録音し、逐語録に起こし、質的統合法 (KJ 法) で分析した。

#### 4. 結果

FGI の参加者は 7 人であり、男性 2 人、女性 5 人であった。

FGI の逐語録から生成されたデータラベル数は、79 枚であった。4 段階を経て 6 枚の最終ラベルに集約され、次の構造が見いだされた。「苦労する撮影までの過程が脳への刺激」という『思考の促進』の結果、「参加者同士の良い刺激と楽しい経験による交流の深まり」という『相互理解』と相まって「自分自身を見つめ直し、将来を見据えた学習と目標発見の契機」という『自己理解』が進み、さらに「外出の促進、積極的な活動の後押し、地域への関心の高まり」という『視野と行動の拡大』がもたらされた。一方、「テーマの決め方と写真技術の向上」という『参加者の課題』と「全員の写真を見る機会、対話の場、写真集という共有の機会の充実」という『プログラムの課題』もあった。

#### 5. 考察

テーマについて写真を撮るためには、テーマの意味を考え被写体を自分で決めて撮るというフォトボイスの手法の特性が『思考の促進』をもたらした。また、『相互理解』や『自

己理解』は、他者との交流を基盤として自分自身の問題を意識化することを示しており、フォトボイスプログラムによってエンパワメントプロセスをたどっていることを示している。また、自身やプログラムの課題があがっているのは、より良くしたいという意欲であり、‘わがこと’として主体的にプログラムに関わっていることを示しており、参加者がエンパワメントしたことの一つの現れと考えられる。さらに「外出の促進、積極的な活動」は、活動の増加や拡大を意味し、「地域への関心の高まり」は今後の地域での活動への参加の可能性を表し、フォトボイスにより生活機能への波及したことを示している。

フォトボイスの手法を取り入れたプログラムは、参加者をエンパワメントし、生活機能への波及効果があり、介護予防プログラムに取り入れる有用性が示された。しかし、今回はフォトボイスの手法を介護予防の複合プログラムの一部として取り入れたものであり、他のプログラムの影響を排除できない。また、対照群を設けていないこと、質的探索的な研究方法であることの限界があり、それらを考慮した研究が必要である。

## 第5章

### 研究3 「フォトボイスを用いた地域在住高齢者の生活機能の維持・向上をめざす介護予防プログラムの開発」

#### 1. 目的

介護予防プログラムとしてフォトボイスの手法を単独で用い、地域在住高齢者が主体的に参加し、生活機能の維持・向上を目指す介護予防プログラムを開発することを目的とする。

#### 2. 対象者

##### 1) 募集方法

北海道 H 市 A 地区在住の住民組織等に、募集チラシの配布と参加者の勧誘を依頼

##### 2) 割り付け方法

乱数表を用いて応募者をフォトボイス群と講話群の二群に割り付けた。ただし、地域在住高齢者を対象にするので、倫理的配慮から全員が、クロスオーバーでフォトボイスプログラムと講話を経験できるようにした。キャリーオーバー効果を否定できないことおよび研究目的から、前半のフォトボイスと講話が終了した時点のデータのみを分析した。

##### 3) グループ編成

フォトボイス群は、性・年齢・生活背景を考慮して5-6人を1グループとして編成し、講話群は、グループ編成は行わなかった。

#### 3. 方法

##### 1) フォトボイスプログラムの開発

フォトボイスの先行研究と研究2の結果を基に、テーマ、内容、ファシリテート方法を考案した。

##### (1) プログラムのテーマ

高齢者の多くが関心のある認知症予防をきっかけとして自身の生活全般をみなおし、生活機能の維持・向上をめざすことをテーマとした。

## (2) プログラムの骨子

- ・プログラムのテーマに沿った撮影テーマを研究者が設定するが、研究 2 の結果からできるだけ参加者が自主的にテーマを設定できるようにした。
- ・撮影テーマの提示、撮影、撮影した写真についてのグループ対話を行う。対話は、「何を映したか、なぜそれを映したか、それを映したことで何を考えたか」を中心に話し合う。
- ・グループの中で課題が明確になり、達成可能な生活の目標が定まるようにする。最後に「みんなで元気に暮らすための 10 箇条」を考える。
- ・批判せず、発言内容を受け入れるなどの対話の原則を参加者に事前に伝えた。
- ・注意点として、肯定的な内容だけでなくつらさや苦痛と直面する可能性があるが、それは良い結果につながる可能性があることを伝えた。

## (3) プログラムの内容

説明会：プログラムの説明

第 1 回：実施方法のガイダンス：テーマと写真に関する実施にあたっての注意（写真の撮影技術、倫理、安全について）

第 2 回：「認知症に関係すること／もの」  
対話のルールの確認

第 3 回：「好きなこと・続けられていること、大事にしていることなど」

第 4 回：「生活・健康に関係すること」  
これまでの各グループの状況についての共有

第 5 回：「希望・目標・続けたいこと」

第 6 回：「地域の課題」、元気に暮らすための 10 箇条を決める

第 7 回：発表会：各グループの代表者あるいは全員で発表

第 8 回：意見交換

ファシリテーター

グループに 1 人ずつ地域包括支援センター保健師、精神保健福祉士、看護師等を配置した。ファシリテーターには、事前に研修を実施した。

## 2) 実施期間

初回の説明会の後、フォトボイス群は 5 月 16 日～7 月 25 日、講話群は 5 月 14 日～7 月 23 日の期間に毎回 1 時間 8 回ずつ実施した。

## 3) プログラムの評価枠組み

Hawe らの評価の枠組みを参考に、プロセス評価としてプログラムの質を、影響評価としてエンパワメント・精神的健康状態、結果評価として生活機能について、それぞれ量的調査と質的調査を行った。

## 4) データ収集方法

量的調査は、説明会で認知機能検査、第 1 回にベースライン調査、第 8 回に認知機能検査・質問紙調査を実施した。質的調査は、8 回終了後フォトボイス群 6 人、講話群 5 人を対象に別々に FGI を実施した。

## 5) 量的調査項目



- (1) 参加者背景：性別、年齢、家族人数、健康度自己評価
- (2) プロセス評価：出席率、出席回数、満足度
- (3) 影響評価：歩行意欲時間、WHO-5、K6、認知異能低下の自覚
- (4) 結果評価：ファイブログ、老研式活動能力指標、外出頻度、活動参加数

#### 6) 量的調査の分析方法

ベースライン値を共変量とする一般線型モデルを用いた反復測定による共分散分析を行い、群の要因と（群間要因）と時期の要因（群内要因）の交互作用の有無を検討した。次に、全回出席した者について両群を同様に分析した。

#### 7) 質的調査の構成

プロセス評価、影響評価、結果評価の視点で FGI、事例、グループワークの最終成果物からデータを収集し、FGI は質的統合法（KJ 法）で、事例とグループワークの最終成果物は質的記述的に分析した。

### 4. 結果

#### 1) 対象者の属性

応募者 77 人を乱数表により、フォトボイス群 39 人、講話群 38 人の 2 群に割り付けたが、キャンセル者・脱落者と認知症や MCI の疑いがある者を除外したところ、フォトボイス群 23 人、講話群 28 人が分析対象となった。フォトボイス群は、男性 10 人、女性 13 人、講話群は、男性 7 人、女性 21 人であり、年齢、教育年数、家族人数等に両群で有意な差はなかったが、自覚的健康度については、「健康でない」が講話群に有意に多かった（ $p=0.013$ ）。

#### 2) 量的調査

プロセス評価では、出席率・満足度は両群ともに高かった。影響評価では、全分析対象者および全回出席者で、認知機能低下の自覚はフォトボイス群がやや改善したが、講話群では悪化し有意な交互作用が認められた（ $p<0.001$ 、 $p=0.01$ ）。全回出席者で、歩行意欲時間は、フォトボイス群が上昇したのに対し、講話群は低下し有意な交互作用が認められた（ $p=0.05$ ）。それ以外の指標では有意な差は認められなかった。結果評価では、有意な差は認められなかった。

#### 3) 質的調査

FGI では、フォトボイス群は、93 枚のラベルが生成され、7 枚に集約され、『交流の成果』『問題意識の深化』『内なる力の変化』がおきていた。さらに『生活への活用』『地域活動への活用』への波及がみられた。講話群では、64 枚が 6 枚に集約された、『加齢の受け止め』『認知機能検査に対する肯定的評価』『認知機能検査による気づき』『教室の良い点』等があがった。代表的な 1 事例では、主体的に課題に取り組み、新しい活動を取り入れる状況が示された。グループワークの最終成果物の内容 48 個あり、『気持ちの持ち方・心がけ』『望ましい活動』『社会的な役割への関心と参加』の 3 つに集約された。

### 5. 考察

フォトボイスも講話もプログラムの質は高いといえる。フォトボイス群で認知機能低下の自覚が悪化しなかったことは、認知機能に関する不安を助長しなかったといえる。歩行意

欲時間の延長は、自己効力感が高まっていると考えることができる。全対象者では変化はなく、全回出席した者で、有意に変化し参加率が高いほど効果が現れたと考えられる。フォトボイス群の FGI では、エンパワメントのプロセスである「他者との相互作用」「自身の客体化」「新しい価値観の獲得」が見られ、また事例では、「主体的実践行動」「意欲」が見られている。量的調査と質的調査の結果から、フォトボイス群では、講話群と異なり、エンパワメントが生じていると考えられる。これは、写真を元にした対話というフォトボイスの手法が、代理体験を容易にし、自己効力感を高めたと考えられる。

生活機能に関して、量的調査では有意な変化は認められなかった。これは、プログラム実施期間の 2.5 ヶ月では、評価指標に現れるまでには至っていないことが考えられる。また、高齢者は、個人特性の違いが大きいことや影響要因をコントロールすることが難しいことがあげられる。質的調査では、フォトボイス群に、活動や参加の増加へ波及効果が見られたが、講話群では、それらは見いだされていない。グループワークの最終成果物では、『望ましい活動』、『社会的な役割への関心と参加』という活動/参加に関する内容が見いだされ、今後の生活機能の向上が期待できる。

以上から、今回開発したフォトボイスを用いた介護予防プログラムは、地域在住高齢者をエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながることを確認された。今後は、継続的な効果を評価する研究を行う必要がある。

## 第 6 章 総括

フォトボイスを用いた介護予防プログラムは、地域在住高齢者をエンパワメントし、生活機能の維持・向上につながることを確認された。専門家の知識伝達や指導ではなく、参加者の相互作用により、当事者自身が望ましいと思う活動を認識し選択することを促す意義がある。「人生や生活の中で“したいこと”を“なじみの”環境の中でできる限り続ける」ための新たなプログラムとして介護予防に貢献できる。

## 文献

- 1) 厚生労働省：介護予防マニュアル改訂版．介護予防について  
([https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1\\_1.pdf](https://www.mhlw.go.jp/topics/2009/05/dl/tp0501-1_1.pdf), 2019. 11. 29 アクセス) (2012)
- 2) 障害者福祉研究会：ICF 国際機能分類－国際障害分類改訂版－. 17, 中央法規出版, 東京 (2002).
- 3) 大川弥生：生活機能とは何か－ICF:国際生活機能分類の理解と活用－. 2-5, 東京大学出版会, 東京 (2007).
- 4) 丸谷康平, 藤田博暁, 新井智之他：地域在住中高年者に対する運動機能改善のための運動介入－体格指数の違いによる効果の検討－. *Osteoporosis Japan*, 23(1) : 99-107 (2015).
- 5) 江尻 愛美, 大淵 修一：介護福祉・健康づくりの実践事例 運動器機能向上、口腔機能向上と健康づくりの広域対策. *介護福祉・健康づくり*, 3(2) : 126-129(2016).
- 6) 芳賀博：介護予防の現状と課題. *老年社会科学*, 32(1) : 64-69 (2010).
- 7) 大川弥生：災害時の新たな課題：「防ぎうる生活機能低下」予防－高齢者の最大課題としての生活不活病－. *日本老年医学会雑誌*, 53(3) : 187-194(2016).
- 8) 厚生労働省：これからの介護予防. (<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000075982.pdf>, 2017. 6. 7 アクセス) (2014).
- 9) 福間美紀, 塩飽邦憲, 馬庭留美：高齢者の複合型認知症プログラムによる認知機能改善の効果. *日本農村医学会誌*, 63(4) : 606-617 (2014).
- 10) 木村美佳, 守安愛, 熊谷修, 他：一自治体における複合プログラムによる介護予防事業(すみだテイクテン)の評価. *日本公衆衛生雑誌*, 63(11) : 682-693(2016).
- 11) 厚労省：平成 26 年度 介護保険事業状況報告 (年報)  
([http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/14/dl/h26\\_gaiyou.pdf](http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/14/dl/h26_gaiyou.pdf)<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000075982.pdf>, 2017. 6. 7 アクセス) (2015).
- 12) 福田吉治, 八幡裕一郎, 今井博久監修, 今井博久他翻訳：一目でわかるヘルスプロモーション. *理論と実践ガイドブック* : 9-11, 国立保健医療科学院, 埼玉 (2008).
- 13) 野嶋佐由美：エンパワメントに関する研究の動向と課題. *看護研究*, 9(6) : 3-14 (1996).
- 14) 巴山玉蓮, 星旦二：エンパワメントに関する理論と論点. *総合都市研究*, 81 : 5-18 (2003).
- 15) 安梅勅江：保健福祉学の理念. 高山忠夫 (編), *保健福祉学*, 13-18 : 東京 (1998).
- 16) 島内憲夫・鈴木美奈子：ヘルスプロモーション WHO バンコク憲章. 16-19: 垣内出版, 東京 (2012).
- 17) Shearer, N. B, Fleury, J, Ward, K. et al. :Empowerment Interventions for Older Adult. *Western Journal of Research*, 34(1) : 24-51. (2012).
- 18) 井出 成美, 佐藤 紀子, 山田 洋子他：社会的サポートネットワークの構築につながる高齢者のエンパワメント指標の試案. *文化看護学会誌*, 1(1) : 3-11(2009).
- 19) 兪今：うつ病予防のためのポピュレーション・アプローチ・プログラムの応用と効果-高齢者のうつ病予防と支援事業としてのハッピー教室の取り組み-. *Dia News*, 74, 3-6 (2003).
- 20) 芳賀博：地域におけるアクションリサーチへの期待. *老年社会科学*, 38(3) : 357-363(2016).
- 21) 武田丈：参加型アクションリサーチ (CBPR) の理論と実践 社会変革のための研究方法論. 111-123, 世界思想社, 京都 (2015).
- 22) Wang, C. : Photovoice: A participatory action research strategy applied to women's

- health. *Journal of Women's Health*, 8 (2), 185-192. (1999).
- 23) Wang, C. & Burris, M. A. : Empowerment through Photo Novella: Portraits of participation. *Health Education Quarterly*, 21(2), 171-186. (1994).
- 24) Wang, C., & Burris, M. : Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. *Health Education and Behavior*, 24 (3), 369-387. (1997).
- 25) Leclerc C.M:Falling Short of the Mark: Tales of Life After Hospital Discharge. *Clinical Nursing Research*, 11 (3),242-263. (2002).
- 26) Mahmood A, Chaudhury H, Michael Y, et al: A photovoice documentation of the role of neighborhood physical and social environments in older adults' physical activity in two metropolitan areas in North America. *Social Science and Medicine*, 74 (8),1180-1192 (2012).
- 27) M Rebecca Genoe: The role of leisure within the dementia context. *Dementia*, 13 (1), 33-58 (2014).
- 28) Woda A, Belknap R, Haglund K, et al.: Factors influencing self-care behaviors of African Americans with heart failure: A photovoice project. *Heart and Lung: Journal of Acute and Critical Care*, 44 (1),33-38 (2015).
- 29) Catalane C, Hinkler M:Photo voice: A review of the literature in health and Public health. *Health Education and Behavior*, 37(3), 424-451(2010).
- 30) 武田丈：フォトボイスによるコミュニティのエンパワメント. *ソーシャルワーク研究*, 37(3) : 220-230(2011).
- 31) 吉浜美恵子：被災した女性たちのフォトボイス：AAA、GGG そして CCC. *コミュニティ心理学研究*, 19(1) : 10-17(2015).
- 32) Mieko Yoshihama, Tomoko Yunomae et al.: Participatory Investigation of the Great East Japan Disaster: Photo Voice from Women Affected by the Calamity. *Social Work*, 63(3), 234-243, <https://doi.org/10.1093/sw/swy018>. (2018).
- 33) 道信良子, 澤田いずみ, 今野美紀, 他：札幌医科大学「地域医療合同セミナーⅠ」における医療職種理解のためのフォトボイスの活用. *札幌医科大学保健医療学部紀要*, 12 : 45-50(2010).
- 34) 森和代：フォトボイスによる育児支援の有用性について. *日本ウーマンズヘルス学会* 12(1) : 120-126(2013).
- 35) Claire L. Mann & Christina N. Gillezeau & Alessandro Massazza et al.: Fukushima Triple Disaster and the Road to Recovery: A Qualitative Exploration of Resilience in Internally Displaced Residents. *Psychiatr Q*, 89:383-397, <https://doi.org/10.1007/s11126-017-9542-7>. (2018).
- 36) 増田雄太, 荻野朋子：高齢者施設で生活する認知症高齢者への写真療法の実践. *中京学院大学看護学部紀要*, 6(1) : 37-48(2016).
- 37) 石川眞澄, 斉藤民：高齢者におけるポジティブな写真鑑賞プログラムー実施可能性と気分改善効果に関する予備的研究ー. *日本写真芸術学会誌*, 26(1) : 27-33 (2017).
- 38) 石原眞澄：写真による心理療法 歴史とその変遷. *日本写真芸術学会誌*, 22(2) : 19-25(2013).
- 39) 石原眞澄：写真表現実践(撮る・観る・語る)による自己探求：グループワークによる心理的効果

- に関する実践報告. 日本写真芸術学会誌, 23(1) : 31-37(2014).
- 40) 石原眞澄 : 写真撮影の心理的効果に関する fMRI 研究 (<http://hdl.handle.net/10097/58422>, 2017. 5. 19 アクセス) (2015).
  - 41) 谷口優, 小宇佐陽子, 新開省二他 : 身体活動並びに知的活動の増加が高齢者の認知機能に及ぼす影響. 日本公衆衛生学会誌, 56 (11) : 784-794 (2009).
  - 42) 作並亜紀子, 服部ユカリ : 認知機能向上教室の効果に関する研究. 日本老年看護学会第 17 回学術集会, 金沢 (2012).
  - 43) 作並亜紀子, 服部ユカリ : 高齢者の認知機能向上プログラムに関する研究. 日本老年看護学会第 19 回学術集会, 名古屋 (2014).
  - 44) 作並亜紀子, 服部ユカリ : 高齢者の認知機能向上プログラムに関する研究. 日本老年看護学会第 20 回学術集会, 横浜 (2015).
  - 45) 大川弥生 : よくする介護を実践するための ICF の理解と活用 目標試行的介護にたつて. 18-21 中央法規出版, 東京 (2009).
  - 46) 巴山玉蓮, 星旦二 : エンパワメントに関する理論と論点. 総合都市研究, 81 : 5-18 (2003).
  - 47) 岩川奈津, 都築繁幸 : 社会福祉領域におけるエンパワメント概念の枠組みと障害種別のエンパワメントの内容の検討. 障害者教育・福祉学研究, 13 : 55-66 (2017).
  - 48) 三島一郎 : 精神障害回復者クラブーエンパワメントの展開. 山本和郎編 臨床心理学的地域援助の展開ーコミュニティ心理学の実践と今日的課題. 164, 培風館, 東京, (2001).
  - 49) 三島一郎 : エンパワメント 日本コミュニティ心理学会 (編) コミュニティ心理学ハンドブック. 70-84, 東京大学出版会, 東京 (2007).
  - 50) 野嶋佐由美 : エンパワーメントに関する研究の動向と課題. 看護研究, 29 (6), 453-464(1996).
  - 51) カメラ映像機器工業会 : 日本市場のデジタルカメラ購入者特性 (年齢別構成). (<http://www.cipa.jp/stats/documents/common/cr800.pdf#search> 2019. 7. 1アクセス) (2019).
  - 52) 青山ハッピー研究所 : 毎週アンケート第 640 回日ごろ写真を撮っていますか? (<https://www.asahigroup-holdings.com/company/research/hapiken/maian/201707/00640/> 2019. 11. 19 アクセス) (2017).
  - 53) 服部ユカリ, 牧野志津, 芳賀博他 : 地域在住高齢者に対するフォトボイスの有用性に関する予備的研究. 第 12 回応用老年学会. 東京 (2017).
  - 54) 矢富直美編著, 杉山美香, 宮前史子著 : 失敗しない認知症予防の進め方ー行動変容とソーシャル・マーケティングの理論と実践ー. 104-105 (2007).
  - 55) 矢富直美 : 地域型痴呆予防マニュアル ; 指導者のための介護予防完全マニュアル (東京都高齢者研究・福祉振興財団監修). 197-199 (2004).
  - 56) Hillsdon M, Thorogood M, Anstiss T, et. al : Randomized controlled trials of physical activity promotion in free living populations: a review. Journal of Epidemiol Community Health, 49, 448-453 (1995).
  - 57) 矢富直美, 宇良千秋 : 地域型認知症予防プログラム実践ガイド. 30-32 中央法規出版, 東京 (2008).
  - 58) 大久保善郎, 清野諭, 藪下典子, 他 : 地域在住高齢者のウォーキング実践と複数回または傷害を伴う転倒の関連ー転倒リスク保有数による差異ー. 体力科学, 60 : 239-248(2011).

- 59) 青柳 幸利：【フレイルの予防とウォーキング】 フレイルの予防を目的としたウォーキングの有効性 歩数を指標として(中之条研究). 理学療法, 33 : 1111-1118(2016).
- 60) 厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会：健康日本 21 (第 2 次) の推進に関する参考資料  
([www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21\\_02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21_02.pdf). 2017. 5. 17 アクセス) (2012).
- 61) 山浦晴男：質的統合法入門 考え方と手順. 15-78, 医学書院, 東京 (2012) .
- 62) 麻原きよみ：高齢者のエンパワメントー文化的見地からのアプローチ. 日本老年看護学会誌, 5 (1) : 20-25 (2000).
- 63) club willbe :自由記述の分類と分析から見るシニアの指向性②『将来を考える上で、今あなたが「不安」に感じていることはありますか?』. willbe シニア総合研究所レポート,  
(<https://www.club-willbe.jp/soken/enquet/report2.html#a1> 2019. 5. 17 アクセス) (2018).
- 64) 大澤ゆかり, 松岡広子, 百瀬由美子他：地域住民の認知症に対する関心と不安およびイメージの検討. 愛知県立看護大学紀要, 13 : 9-14 (2007).
- 65) 上村一貴：認知症の危険因子. 42-43 山田実編著 高齢者の生活機能向上支援 地域ケアでの実践と手法の活用, 文光堂, 東京 (2017).
- 66) 星且二：Global Standard の視点からの医療 英国保健医療改革から見た保健医療の展望. 治療, 85 (1) : 78-85 (2003).
- 67) Penelope Hawe, Deirdre Degeling, Jane Hall 著, 鳩野洋子, 曾根智史訳：ヘルスプロモーションの評価 成果につながる 5 つのステップ. 131-160, 医学書院, 東京 (2003).
- 68) 麻原きよみ：エンパワメントと保健活動 エンパワメント概念を用いて保健婦活動を読み解く. 保健婦雑誌, 56 (13), 1120-1126 (2000).
- 69) 岩佐一, 稲垣宏樹, 吉田祐子他：地域在住高齢者における日本語版「WHO-5 精神的健康状態表」(WHO-5-J) の標準化. 老年社会科学, 36 (3) : 330-339 (2014).
- 70) 南部泰士, 石井範子, 柳屋道子：介護予防基本チェックリストにおけるうつ項目の検討. 厚生指標. 61 (5) : 23-29 (2014).
- 71) 森川将行, 岡本希, 岩本淳子他：地域在住高齢者の主観的認知機能に影響する要因：藤原京スタディ. 日本公衆衛生学会誌抄録集 71 回, 380 (2012).
- 72) 田中稔久, 武田雅俊：主観的認知機能障害 (SCI) から軽度認知機能障害 (MCI) へ. 45-52 (2011).
- 73) 山崎幸子, 藺牟田洋美, 増井幸恵他：高齢者の閉じこもりをもたらす同居家族の関わりチェックリストの開発. 老年社会科学, 39 (3) : 352-364 (2017).
- 74) 尾島俊之, 柴崎智美, 橋本修二：いきいき社会活動チェック表の開発. 公衆衛生, 62, 894-899 (1998).
- 75) M. H. Katz 著, 木原雅子, 木原正博訳：医学的介入研究のデザインと設計 ランダム化/非ランダム化研究から傾向スコア、操作変数法まで. 56-58, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 東京 (2013).
- 76) 江本リナ：自己効力感の概念分析. 日本看護科学学会誌, 20(2), 39-45 (2000).
- 77) 末田啓次, 菊池信子, 丸山総一郎：高齢者への Positive Focus 的対応と介護予防: 社会福祉学. 老年心理学・精神医学からの提言：神戸親和女子大学研究論叢, 47 : 47-57 (2014).
- 78) 伊藤智子, 景山真理子, 森山美恵子：コミュニティを基盤としたミニデイサービス事業に見る

- 高齢者エンパワメントプロセスと促進要因の検討. 日本地域看護学会誌, 9 (1) : 53-58 (2006).
- 79) 澤田いずみ, 佐伯和子, 和泉比佐子: 高齢者を対象とした介護予防教室におけるグループワークでの相互作用—高齢者の自己評価をとおして—. 日本健康教育学会誌, 8(1・2):5-12(2000).
- 80) Barbara A. Graham. グループ教育の方略. Nancy I. Whitman. Teaching in Nursing Practice. Appleton & Lange, Inc, 1992; 安酸史子訳: ナースのための患者教育と健康教育、330-346, 医学書院, 東京(1996).
- 81) 岡堂哲雄: 集団力学入門—人間関係の理解のために—. 84-87, 医学書院, 東京(1982).
- 82) 石原眞澄, 斎藤民: 写真による自己表現とポジティブ・エモーションの意義—成熟期における自我の統合に向けて—. 日本写真芸術学会誌, 25(1), 37-44 (2016).
- 83) 福嶋篤, 他: 地域在住高齢者による自主グループ設立過程と関連要因. 日本公衆衛生雑誌, 61(1) : 30-40 (2014).
- 84) Social Media Lab : 2019 年 6 月更新! 12 のソーシャルメディア最新動向データまとめ. (<https://gaiax-socialmedialab.jp/post-30833/>, 2019. 6. 8 アクセス) (2019).
- 85) 野尻雅美: QOL 座標理論の基礎と展開、新しい QOD 概念へ. 日本健康医学会雑誌, 28(2), 98-106 (2019).
- 86) 株式会社 NTT データ研究所: 平成 30 年度老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業 介護予防・日常生活支援総合事業及び生活支援体制整備事業の効果的な推進方法に関する研究事業報告書「介護予防・日常生活支援総合事業、生活支援体制整備事業これからの推進に向けて～伴走型支援から見えてきた事業推進の方策～」, 37, ([https://www.nttdatastrategy.com/services/lifevalue/docs/h30\\_04\\_2\\_jigyohokokusho.pdf](https://www.nttdatastrategy.com/services/lifevalue/docs/h30_04_2_jigyohokokusho.pdf) 2019. 9. 1 アクセス) (2019).